

2002年 6 月12日（水） 午後 6 時半～10時半 Chairman's Private Dinner
at University Club in Montréal

—2002年 8 月29日現在—

- I. 5時半 Hotel を出て Mansfield Street 2047 の University Club へ向かう。比較的簡単に見つかった。外から見る限りでは何の変哲もないレンガ造り 4 階建ての古ぼけた建物にしか見えない。



扉を 2 つ開けて入ると、1 階は暖炉を中心にマホガニーと覚しき腰壁を廻し、鋳打ち・皮張りの椅子を配した古色蒼然ながらも荘重な雰囲気を湛える待合室だった。

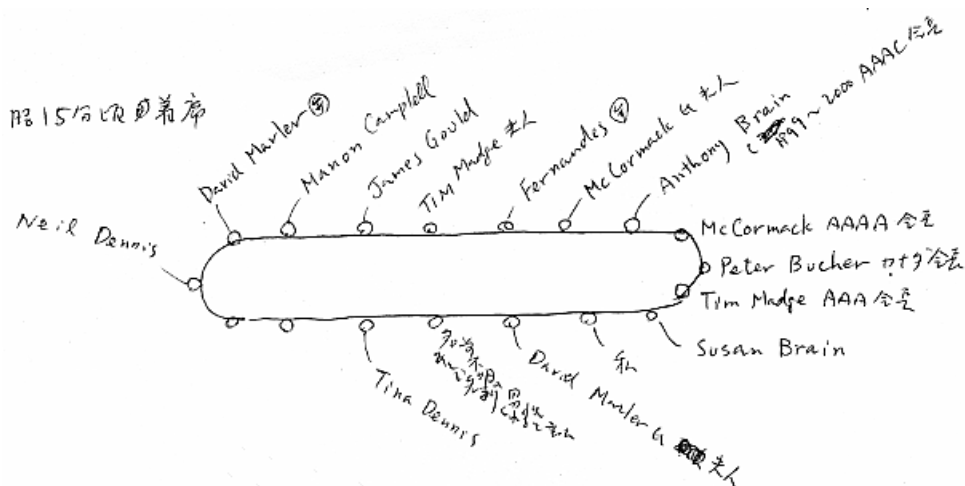


受付の老僕に会場を尋ねると3階（日本式の4階）Founders という部屋だという。木造の引き戸のついたエレベーターで上がる。会場は7 m×15m、天井高3 m位の細長い部屋で、そこに両端が円めである長いテーブルが置かれ、18人分の席がセットされていた。待っている間に卓上のろうそく立てに火が灯される。途端に客を待つ雰囲気が漂ってきた。



その隣の部屋、5 m×6 m位の部屋で待つ。私に次いで来たのは Rui M. Fernandes というトロントの弁護士、次いでA A A C現会長の Average Adjuster Peter Bucher、次にC M L A会長の James E. Gould, Q.C.、1999～2000年A A A C会長だった Anthony Brain 氏とその夫人（Susan さん）、A A A C Secretary General の Neil J. Dennis とその夫人（Tina さん）、そこへ次々と Tim Madge A A A会長夫妻、McCormack A A A A会長夫妻（夫人 Patti は夫と相応の年輩に見えるが、往年のハリウッドの女優のように美しい）、2000～2001A A A C会長の David Marler 夫妻が到着。一挙に賑やかになる。その他、Manon Campbell という Montréal 港湾庁に勤務する女性も来ていた。

7時15分着席。



挨拶も乾杯の儀式もないまま食事が始まる。そのメニューとワインは下記のとおり。



Chairman's Dinner
Association of Average Adjusters of Canada

THE MENU

Salade gaspésienne
Smoked and marinated salmon, shrimps and scallops

 Consommé de volaille au gingembre et saké
Poultry consommé with ginger and saké

 Médallions de filet de bœuf Vigneronne
Beef tenderloin medallions with red wine sauce
 Pommes de terre nouvelles / *New roast potatoes*
 Bouquet de légumes / *Seasonal vegetables*

 Choco-orange "Caprice de Séville"
Dark chocolate, vanilla and orange cake

 Café, Thé / *Coffee, Tea*
 Petits fours secs / *Home made cookies*

THE WINES

Benziger Fumé Blanc 1998 – Benziger
 Kendall-Jackson Collage 1999 (California)

UNIVERSITY CLUB OF MONTREAL
 June 12, 2002

10分位経った頃、Lahaise さん（A I D E 会長）が到着して私と David Marler 氏の間に一つ席を作って貰う。これで19人となった。

部屋はシャンデリアが3ヶ、卓上のロウソクが2ヶ、その他、小さなガラスのカットの中で小さなロウソクの光が揺れるのが計10ヶ位。

私には右隣の Susan Brain さんが気さくに話し掛けてくれた。A A A J 東京定時総会の招待状を husband に送ると言ったら私も行くと言って喜んでいて。Lahaise 会長到着後、私は5月の London Savoy Hotel での Annual Dinner における jokes

について彼の見解を聞き取った。

食事が終わりに近づき、デザートとコーヒーになった頃、David Marler A A A C 直前会長が Peter Bucher 現会長に挨拶を促す。Bucher 会長が挨拶し、次いで McCormack 会長が、そして Madge 会長が、そしていよいよ私の番になった。私は立ち上がり、要旨次のとおり述べた。

「カナダと日本は太平洋で遠く隔てられてはいるが、私は4つの理由でカナダに従前から親近感を抱いてきた。

①は、カナダが1936年に The Water Carriage of Goods Act を制定したことであり、

②は、William Tetley の “Marine Cargo Claims” という素晴らしい本のために、そして私はそれゆえに今日、McGill 大学の構内に入って走り廻ったこと、そして新しく今日、市内の本屋で MARINE CARGO CLAIMS を買ったこと、この “full of suggestions” の著者にまだ会ったことはないが随分前から尊敬していると。」

ここまで述べたら、会場のアチコチから Tetley 教授は明日必ず総会の会場に来る筈だからサインを貰ってやる、必ず貰ってやるとの声が出た。

「③は、日本がカナダから相当量の穀物を買っていること。その関係で私は6年程前 Vancouver の港内と港外から Victoria までの水路を実地に調査したこと。

④は、Margolis 弁護士が私の事務所で働いていたこと。」

と述べ、今回招待を受けたことの謝辞を述べて着席したら（少なくとも他の人と同じ位の）拍手を貰った。右隣の Susan Brain さんが私の右袖を軽く下向きに引っ張り、私の耳に口を寄せて “You have done it veeeery well!” と囁いてくれた。お世辞と分かっているけど嬉しい。

その後、James Gould CMLA会長とA A A C副会長の Claudio Verconich 氏が謝辞を述べ、午後10時半頃散会した。かくして漸く最初のイベントが消化された。

以 上

2002年6月13日（木）

午前10時半～12時 Annual General Meeting at St. James Club

12時半～午後2時半 Lunch at the Same Place

18時半～22時半 Annual Dinner at the Same Place

－2002年9月11日現在－

I. 13日（木）午前10時～正午、素晴らしい天気。St. James Club

- (イ) A A A C の Annual General Meeting (A G M) は午前10時半から開かれるが、30分早く会場に着く。その理由は未だ出席者が到着する前なら会場の写真が撮れるから。

Novotel の玄関前でタクシーに乗る。運転手は真っ黒な人。「ヴレヴナムネ・アラ・ユニオン・アヴェニュー・オーズ・クアラン・サン」と考えながら告げる^[注]と「ウィ、ムッシュー」と言って走り出す。長く住んでいますかと尋ねると「13年」、どこから来ましたかと尋ねると「アイティ」と。アイティとはどこかなとちょっと考えたら、Haïti、即ち、ハイチと知る。

[注] 私のいい加減なフランス語

Montréal は人口300万と言っても中心部は狭いので、私のホテルから Union Avenue 1145番地まで歩いて10分、車なら3分あれば着いてしまう。やがてタクシーが止まったところは角地で、ビルに1145と大きな数字が表示されているので実に分かり易い。木製のドアに真鍮製の把手がよく磨かれて光っている。これを押して入るとすぐまた扉がある。冬が余程寒いのであろう。中に入ると白い服の受付の女性が「ボンジュール、ムッシュー」と挨拶してくれる。私が「アソシアション・・・」とそこまで言ったら、すぐにその階を右に進んだ最初の部屋だと教えてくれた。このビルそのものは堂々たる近代的ビルである。おそらく Montréal で1～2を争う会員制クラブなのであろう。会場に入ってみると6m×25m位、天井高6m位の、実に細長い部屋で、椅子が下記の如く、全部で60席並べてあった。



- (ロ) 会場には Tina さん夫妻のほかは居なかった。挨拶もそこそこに会場の写真を1枚フラッシュなしで撮っておいた。



やがて出席者がポツポツと到着してくるので挨拶をする。London の Savoy Hotel で5月8、9日会った人、昨夜当地 Montréal の University Club で催された Chairman's Private Dinner で会った人もやって来る。このときやはりこういう会の活動のためには何回でも頻繁に会い、食事を共にし、話をすることが大切だと悟った。それでなくては親しみが湧くわけがない。早めに到着した人は会場の後方でコーヒーを貰って立ち話をしている。

- (ハ) 会場に20~30人も到着したと思われる頃、誰かが私に「Tetley 教授が到着しましたよ！」と知らせてくれ、連れて行ってくれた。同教授は年の頃75歳位か。背丈は私と同じ位、スリムな長身で淡い茶のスーツに蝶ネクタイ、ダンディーでないでたちである。長年尊敬していたその御本人に会うことができ私は差し延べられた手に握手するにも思わず跪きたくなる気持ちであった。人によっては論理的でないところもあると批判するかもしれないが、およそ海法の教科書で Tetley 教授の Marine Cargo Claims 程、自分の頭で考えて書かれた本はないのではなかろうか、そんな思いがよぎった。その Tetley 教授がいま私の眼前に立っている。顔立ちはちょうどギリシアの哲人のような思慮深さを湛えた Richard Shaw (弁護士、現 Southampton Univ. 教授) とわれらが先輩海事弁護士田川俊一先生が御機嫌麗しいときの人を把えて離さないお顔を足して2で割ったようで、村山元総理のような眉の下から慈愛深き目を私に向けている。

「私の Website を見ていますか？」と尋ねられた。「いいえ」と答えると「4th Edition をいま Website に載せている。あと少しで脱稿する予定です。」と話

される。未完の4版を Website に載せる！余程の自信がなければできないことではないであろう。「私の本を買ったそうですね、持っていらっしゃい。」（誰かがそのことを話してくれていたのだろう）私は昨日、書店の袋に入ったままの Marine Cargo Claims 3rd Edition をお持ちした。「前から使っている 3rd Edition は装丁が緩んできたので、昨日 Palais de Justice の前の書店で求めたものです。」教授は傍らの机の上に本を置き、その上方に私の名刺を置いて「最近、視力が弱ったんだが…」とつぶやきながら私のボールペンで次のように署名してくれた。

To FUJII IKUYA
with best wishes
for continued success
Please in touch
William Tetley
Montreal, Jan 13, 2002

書き終えて表紙を閉じた教授は、表紙の右下隅に貼られた小さな紙に \$214 95 と書かれているのに目をとめて「こんな高い値がつけられているのか？」と冗談とも、私への同情ともとれる言葉を洩らし、ニヤリと笑顔を見せた。

高名な教授の時間をお取りしてはいけないと考え、謝辞を述べて去ろうとしたら「明日午前8時に私の研究室へいらっしゃい。扉のボタンを押して入ってくればよい。」と告げられた。なぜかかる光栄に浴するのであるのか？自分に問いかける間もあらばこそ「Yes, I will come on time.」と答えていた。一体何が待ち受けているのであろう。

(二) 10時40分頃 A G Mが始まり、Peter Boucher 会長の講演がなされた。

内容は2002年1月15日 British Columbia 州のカナダ連邦裁判所から出された Fiddler Enterprises Ltd. v. Allied Shipbuilders Ltd. という事件の判決の中で average adjuster の役割の重要さが詳しく述べられたことを歓迎しながらも、average adjuster が従前の如く高い報酬と社会的 status を得られなくなっている現状の中で、若い人を惹きつけるために入会資格の緩和を提案するものであった。その他 off-shore oil industry、punity damages、strict liability nuisance、“AEGEAN SEA” (?) などについて触れられた。

私はその全てについては follow できなかったが、格調高く、中味が濃いと感嘆した。Boucher 会長は Vancouver の adjuster、まだ40代であろう。昨夜の Chairman's Private Dinner では軽妙の印象は受けていたが…流石と言うべきであろう。

(ホ) 会長講演の後、McCormack A A A A会長の謝辞、Madge A A A会長の謝辞、Verconich A A A C副会長の挨拶が述べられ、私はそれに続いて A A A Jを代表

して要旨次の如く述べた。

「30年前には日本でも共同海損精算を必要とする機会が多く、職業的精算人はもとより、保険会社に勤務する若者まで情熱を持って精算業務を担っていた。そのような機会が減少した現在、日本の adjuster も、もう暫く長い間、意気は沈みがちである。そのような中、本日この会場で聴いた会長講演の内容、殊に最近の B C 判決の中の average adjuster に関する叙述は必ずや日本の adjusters を encourage するであろう。なお、A A A J は今年10月23日 Chairman's Dinner、10月24日 A G Mを東京で開くので是非お越し願いたい。」

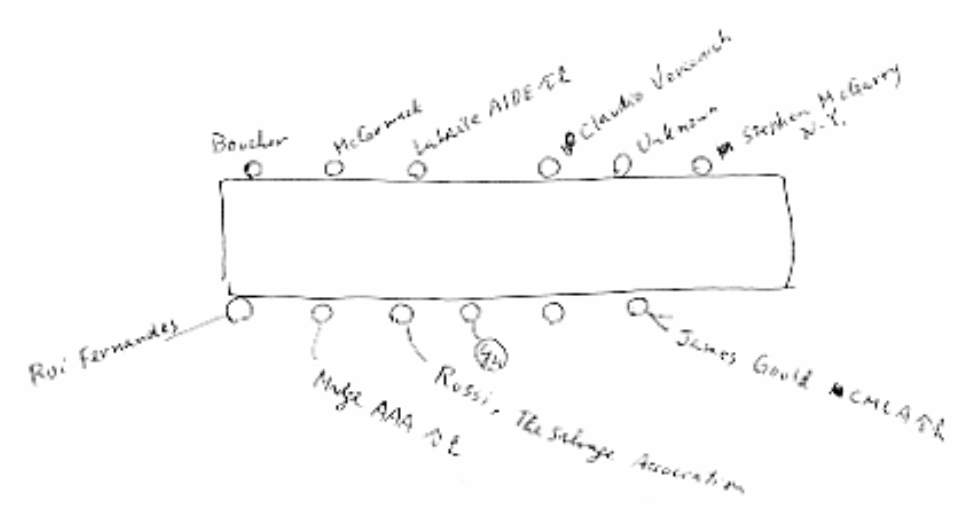
私の後に続いて Lahaise A I D E 会長が謝辞を述べた。

- (へ) その後、Tetley 教授から提案がなされた。その内容は、この日から始まる新年度中に Y A R 改正と、M I A 1906とその progeny (子孫)たる The Marine Insurance Act of Canada 1993 の改正議論を open meeting でなそうという提案であった。そして前者は pollution との関係で、後者は paid to be paid clause の不公正さを正したいということ。また最近緊急の課題となっている“Good Faith”原則に関しても改正が必要だと述べられた。これについては忽那海事法研究会でも採り上げられたことがある。
- (ト) かくしてA G Mは12時過ぎ閉会となった。

II. 続いて13時頃から同じ St. James Club 内の2階の1室で、12名での Boucher 会長招待 Lunch が催され、私もそれに参列した。着席する前に食卓の設えられた会場の後方で立ったままグラスを片手に交歓する。



これはかなり informal なもので、席は自分で好きなところ（或いは空いているところ）を選んで座るというものだった。

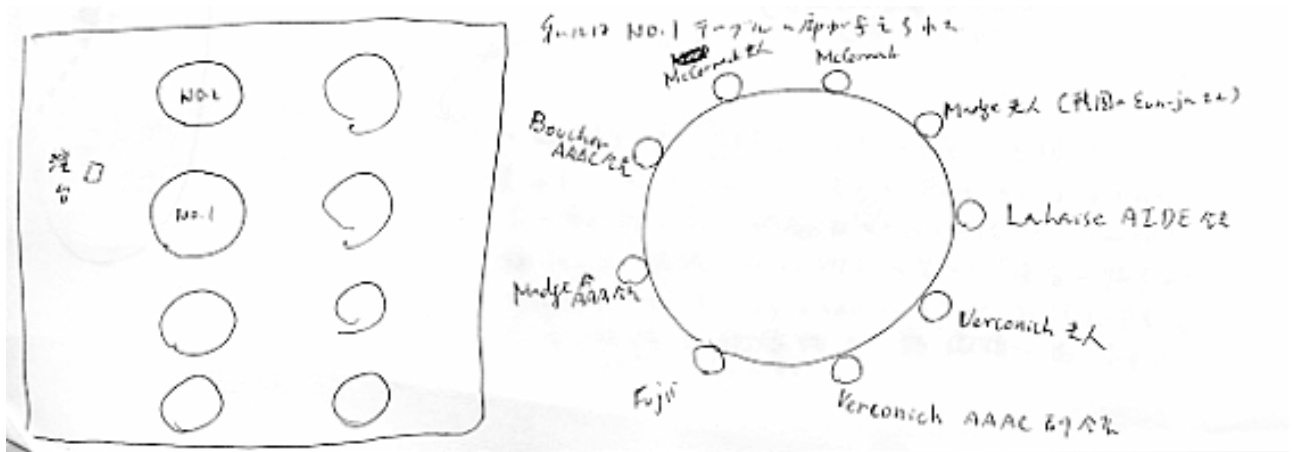


午後 2 時15分散会。McCormack 氏が Taxi で私をホテルまで送ってくれた。

- III. 2 時半ホテルへ戻った私は、昨日 “Marine Cargo Claims” を買い求めた Wilson & Lafleur Itée へ電話してみたが、追加注文した 1 冊はまだ入荷していないとのことだった。
- IV. 2 時45分～4 時50分、午睡。
- V. 5 時～6 時、シャワーを浴び、ドレスアップして再び St. James Club の Annual Dinner 会場へ。準備中の会場を写真撮影。



到着後、約1時間立ったままグラスを片手に立錐の余地こそあれ、大変な混雑の中での挨拶、立ち話、喧騒。やがて耐え難いほど暑くなり、背中を汗の雫が伝い落ちる。それから大広間へ移動、テーブルは8つ用意されていたと思われる。私には No.1 テーブルに席が与えられた。



食事が始まる時 David Marler 前会長が演台に進み、今日この場に集まることができたこと、目の前に供されるべき溢れるばかりの食べ物と酒の恵みを受ける幸せを感謝する旨が述べられ、アーメンの言葉で締めくくられ、これに全員が唱和した。

食事が始まって早いときに Boucher 会長の提案で全員がグラスを持って起立し “To the Queen and Canada” に乾杯。一旦着席した後 Verconich 副会長の提案で（私の記憶違いがなければ）”To the Prime Minister of Canada and the President of the United States” に乾杯。

メニューとワインは下記のとおり。



2 時間も経過した頃、Boucher 会長が演台に進み、過去 1 年間に在任中の support に謝辞が述べられ、次いで Fernandes 新年度会長から挨拶が述べられた。

午後10時半頃散会。別れの挨拶をするとき、昨夜にも増して美しい McCormack 氏夫人の Pattiさんは、わざわざ私に歩み寄り（私がこの日の午後 McCormack 氏に託した折紙に対する御礼と共に）「東京に帰られたら Mr. Shimoyamada によろしくお伝え下さい。」と実に優雅な仕草で述べられた。

建物を出るとき Marler 夫妻に出会った。彼らは私をホテルまで送ると言った。駐車場まで歩く途中で Marler 氏が呟いた。「私は1975年から A A A C に属している。毎年 A A A J に A G M と Annual Dinner について招待状を送ってきたが、私の知る限り日本の chairman が来たのはこれが初めてだ。遠いところ来てくれて本当にありがとう。」私はジーンとしてしまった。その私はといえば、もし1年早く選ばれていたとしたら、種々の事情で来ることはできなかった。全能の神の恩寵としか考えられない。

以 上

2002年6月14日（金）午前8時10分～午前9時
Montréal の McGill 大学法学部 William Tetley 教授訪問記
—2002年9月6日現在—

I. 14日（金）午前8時10分～午前9時

前日のレポートを書き終えたのが14日の午前5時9分だった。もうひと眠りしたいところであったが、午前8時には Tetley 教授の研究室へ来るように言われているので、もし寝過ぎしては大変だ。それゆえ我慢して起き続けることとした。浴槽に湯を張り、ゆっくり身を浸す。午前6時40分頃階下へ下りて軽い朝食を取る。

午前8時5分頃 Taxi に乗り、Tetley 教授から貰った名刺に印刷されている Peel Street 3644 を指示する。約3分程で着いてみると、前日行った McGill 大学の法学部の図書館脇の豪邸風の館であった。木立に囲まれた広い敷地の奥にドッシリとした石造りの館が幾つものトンガリ帽子の屋根を頂いて静かに佇んでいる。



中に入るのに少し手間取ったが、階下で床に掃除機をかけていた婦人に案内され、2階と覚しき部屋の扉の前に行き着いた。扉は大きく開け放たれている。「Sir you have a visitor.」中から Tetley 教授が大きな歩みで出てきた。「How are you doing, my friend! Come on in. Come on in. Did you have a good sleep? Good, Good」と歓待してくれる。

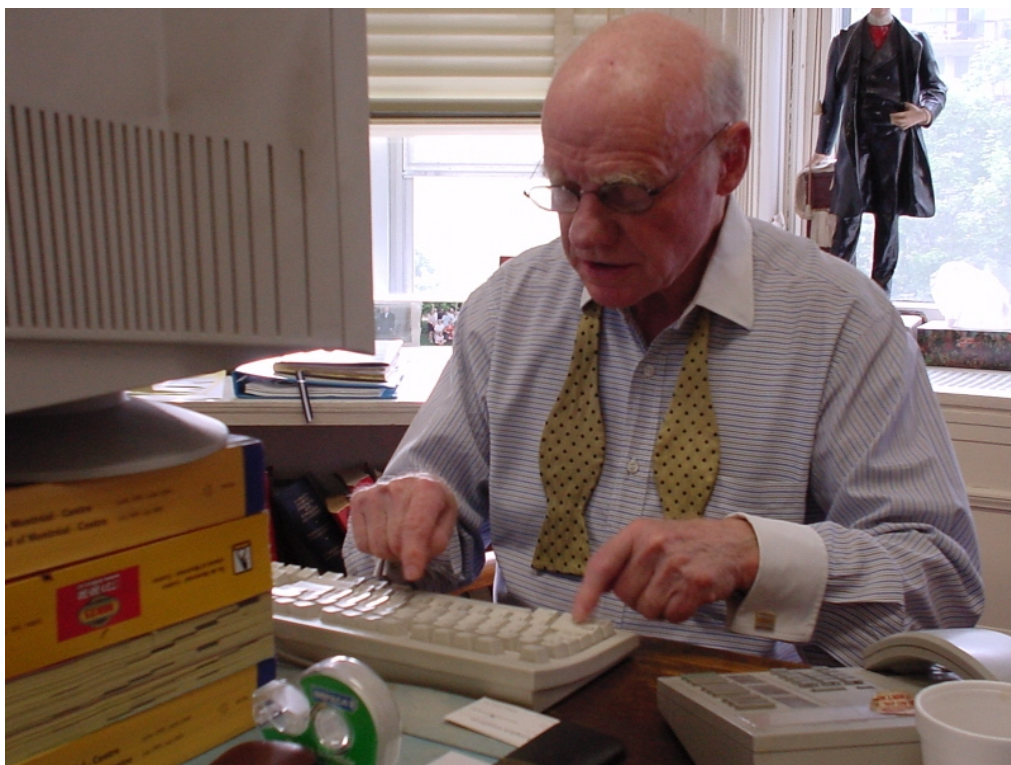
部屋に招じ入れられるとそこは約20畳程の、殆ど正方形の部屋であった。東側と南側に縦長の窓が設けられ、曇り空から降りてきた柔かな光が部屋を満たしている。Tetley 教授は傍らの助手と覚しき若い女性に私を紹介し、来月、中国から裁判官のグループが見学に来るといっているので、いまその準備をしているところだ、ちょっとの

間待ってくれと言って執務机に腰を下ろし、机上高く持ち上げてあるパソコンの画面に目を向ける。肩にカバンを背負ったままの長身の助手は教授の左側に立ったまま資料に目を走らせ“Court of Appeals Judges Room 202---”と読み上げる。教授はシャツの第一ボタンを外し、両襟から蝶ネクタイの両端をそのまま下に垂らし、両手の人差し指だけを上下左右に忙しく Key 盤上に落としてインプットしている。

（何とよく見るとPCの重そうなブラウン管は、位置を顔の高さに合わせるため電話帳4つを積み重ねた上に乗せてある。この高名な教授が……。事故でも起きたらどうするんだろう。）

ところが、このように忙しい筈なのに教授は立ったままにいる私に目を走らせたかと思うと身を翻して席を離れ、私の傍らの椅子を引き出し、向きを変えて座るよう促す。席に戻ったかと思うと画面を見ながら私に向かって“Come, my friend. Look at this, isn't it great?”と言って最近教授が集積したCMIの資料を誇らしげに私に見せる。傍らの女性は「私はもう行かなくてはならないんですよ。早く完成させましょう。」と教授を元の道へ引き戻す。

私は数分間待っていたが、このとき私の心にこの教授の生き生きとした様を映像に収めたい気持ちが勃然として湧いてきた。室内の光の具合はハーフトーンにちょうど良い。北側の窓を背にしている教授を部屋の中央からフラッシュなしで撮ると幾分逆光気味にはなるが、その方が深みのある写真が撮れる。フラッシュを使うと画面全体が台無しになってしまう。ピクセルは2240×1680にしてあるからかなり良い写真が撮れる筈だ。このように計算した私は恐る恐る申し出た。“Will you please permit me to take pictures without flashes?” 教授は画面に向かったまま“Go ahead my friend! Use flashes, I don't mind'em at all.”かくして私は教授の写真を撮影することができた。



待っている間に、私は9時には来るように言われているCMLAの総会に遅れるのではと気になっていた。ゲストとして私の名前が読み上げられたとき、もし会場に私が居ないと私を招待してくれた Gould 会長は（たとえ少しでも）面子を失するであろう…。

5分後、インプットが終わったと思うと教授は蝶ネクタイを締め、上着を着てから “My friend, Let me show you around.” と言って私を部屋の外へと導く。説明によると、この研究室のある建物全体は前世紀スコットランドから Montréal へやって来て、鉄道事業に成功した男が建てたもので、教授がいま研究室として使っている部屋は、昔6つあった寝室の1つであったという。同じフロアの Servants Room に案内され、壁のランプと呼び鈴を示された。各ランプの下に Mr. ---’s Bed Room、Mrs. ---’s Bed Room、Miss ---’s Bed Room と銘板がつけられている。小さな Servants Room が6室もあったろうか。中に小さな机と書類が見えた。「Servants Room が今は助手の勉強室になっている。」との説明。

教授は巨大な、そして壮重な階段室を足早に下りて隣の建物へ案内する。「ここは4年前に完成したばかりだ。この図書はパリの大学と交換した。お互い持っていないものと、2部以上持っているものと。ほら、こんなに立派な学生食堂もあるでしょう。私がここで学んだときは何もなかったヨ。これが法学部の教室です。（1つは階段教室、もう1つは平らな教室だった）私が学生の頃は今私の研究室がある旧館の昔の Bed Room で講義が行なわれていたんですヨ。」

グルグル、グルグルと歩き回って再び教授の研究室に戻った。戻ってみたら顎鬚をたくわえた、浅黒い肌の青年が部屋で待っていた。教授の紹介でイランの弁護士資格を有し、現在、教授の指導を受けてる Ali Hassan 氏と知る。

教授は帽子を被り、曇り空を見上げてからゴルフ場用の青白縞模様の大きな日傘をわし掴みにし、皮の鞆を手にして “Let’s Go” と私たちを促す。このときになって私は初めて教授は9時から始まる Canadian Maritime Law Association の Annual General Meeting へこの場から直接行くのであり、私を案内して下さるのだということが分かった。教授の研究室のある Peel Street 3644 からCMLAのAGM会場の St. James Club のある Union Avenue 1145 までは緩やかな坂を北へ下りながら歩いて約10分である。



途中、右手に石造りのガッシリした建物が見えた。教授は「Look! That entire building is for Professors' Club. But I call it "Sugar Club".」私が「Why sugar club?」と尋ねると「Monopoly! Sugar used to be monopolized many years ago here in Canada.」と言ってワッハッハッハーと歩きながら大笑いする。

やがて Saint Catherine 通りまで下ってきたとき、目の前に巨大な高層ビルが聳え立っていた。教授は傘で示して「Mr. O'---, the best lawyer」私が「not the best lawyer among the lawyers available」と応じたら教授は再びワッハッハッと腹の底から大笑いした。これは前日、A A A C の A G M で Peter Boucher 会長が

「the best lawyer と言って紹介されても安心するわけにはゆかない、その best lawyer と言っても among the lawyers available であることが多いから」と言って会場をドッと沸かしたことがあったからであった。

かくして、ほどなく St. James Club に到着した。

(午前 6 時31分)

以 上